

難波宮跡第100次調査

(大阪府道高速大阪東大阪線の通過に伴う調査Ⅲ)

説明会資料

1977年3月



橋脚MP-2 調査区域 (東から)

高速大阪東大阪線難波宮跡調査会

I. 調査にいたる経過

昭和41年に、難波宮跡の中心部を横断して高速道路「府道大阪東大阪線」の建設が発表されたことから、宮跡の保存と高速道路の建設をめぐって論議を呼ぶことになった。以来両者を調和・両立させるために関係者（文化庁・大阪府教委・大阪市教委・大阪府土木部・大阪市総合計画局・阪神高速道路公団・大阪府警察本部など）の間で協議が続けられ、迂回案やトンネル案、さらに吊橋による長大橋案などが8年にわたって検討された結果、宮跡の主要部に与える影響も少なく、宮跡を整備する上で景観をそこなうことも少ないという理由で「平面案」が採用されることになった。

それによると建設済の高架部分からスロープで平面におり、中央大通の中央を227mにわたって通過、再びスロープで既設の高架上にもどるというものである（図1参照）。

この高速道路建設予定区域は、難波宮跡の内裏・朝堂院の中心部にあたるとともに、飛鳥時代の難波宮下層遺跡や中・近世の石山本願寺・大坂城跡が遺存する区域でもあるが、今回の高速道路工事によって7基の橋脚部分の遺構は完全に消滅する上に、その他の区域も半永久的に調査の機会が失われることになるので、大阪府・市教育委員会は協議の上、「高速大阪東大阪線難波宮跡調査会」（理事長 圓井大阪市教委教育長）を設立し、建設区域内の遺跡調査を実施することになった。

ところで公団の当初設計案では、遺構面が現車道面下80cmと想定されていたが、これまでの発掘調査の結果からみて、それよりも浅く遺構面が出土する可能性が考えられたので公団に要請して遺構深さを調べるための試掘調査を実施させた。試掘調査は昭和50年4月に、遺構が浅く残っていると想定される農林会館から近畿電々ビル間290mの中央分離帯部分を選んで、幅1m、深さ1mのトレンチを人力で掘削し遺構面の深さを調べた。その結果、一部で車道面下50～80cmで遺構面が検出されたので、公団の当初設計案を再検討させ、工事に伴う遺構面の破壊を防ぐために、西側壁式橋脚部分を全面的に50cmかさ上げさせるとともに、平面高速道路部分については、部分的に設計変更することを約させた。

また、遺構破壊が前提となる橋脚部分については、交通安全上必要最少限度に減らすことを要請し、森之宮ランプ西側では、当初計画の6箇所を5箇所に変更させるなど工事に伴う遺構の破壊を最少限度に止めることに努力した。

II. 調査計画

発掘調査は昭和50年6月1日から昭和53年3月31日まで2年10ヶ月にわたって工事と並行してすゝめられるが、法門坂～森之宮ランプ間約800mの範囲のうち、

1. 橋脚MP-2～MP-5間の中央分離帯部分の調査
2. 7基の橋脚部分の調査
3. その他の調査可能な部分の調査
4. 附帯工事を含む工事区域全域にわたる試掘・立会調査を実施することになっている。

これらの調査は通過車輛一日8～10万台と言われる交通量の大きい東西幹線道路「中央大通」路上でおこなわれるだけに、交通処理上、調査の安全確保上種々の制約が伴う上に、調査面積、調査日数等にも一定の限度があって、きわめて困難な調査になると思われるが、

1. これまでの調査成果に基づいて、調査範囲内に想定される遺構の実態をできるかぎり明らかにすることに努める。
2. また、従来道路下になっていたために未調査のまま残されていた部分については、この際できるかぎり未知の遺構の探索に努め、今後の難波宮跡の保存に資することを調査方針としている。

III. 第100次調査概要

上記の調査計画のうち中央分離帯部分と歩道切削に伴う立会・試掘調査を難波宮跡第75次調査として昭和50年6月16日から昭和51年3月6日まで実施し、その調査成果と問題点については、昭和51年4月3日に説明会を開いて発表した。

高速大阪東大阪線難波宮跡調査会「難波宮跡第75次調査(大阪府道高速大阪東大阪線の通過に伴う調査)説明会資料」1976年4月。

この調査に引続いて7基の橋脚部分の調査に入るようになったが、中央大通の交通処理上橋脚部分を一度に調査することが出来ず、北側・南側・中央の三回に分割して調査を実施することになった。このうち橋脚北側部分の調査を難波宮跡第93次調査として昭和51年4月5日より7月20日まで実施し、その調査成果と問題点については、昭和51年8月28日に説明会を開いて発表した。

高速大阪東大阪線難波宮跡調査会「難波宮跡第93次調査(大阪府道高速大阪東大阪線の通過に伴う調査Ⅱ)説明会資料」1976年8月。

続いて各橋脚南側部分の調査を難波宮跡第100次調査として、昭和51年10月12日より実施し、昭和52年1月27日に終了した。調査は、難波宮跡調査会調査主幹中尾芳治(大阪市

教育委員会主任学芸員)を担当者とし、調査員広瀬雅信・藤田幸夫(難波宮跡調査会)、松尾信裕の3人が主として調査に当たった。

調査の実施に当たっては、難波宮址顕彰会の援助と阪神高速道路公園および調査工事を担当した株式会社間組の協力を得た。記して謝意を表したい。

発掘調査を実施している橋脚部は、MP-1・2・5・6・7・8・9(図1参照)の7個所で、3回に分割しておこなわれる調査区域の面積は表1の通りである。

表1

	第1期(北側)	第2期(南側)	第3期(中央)	合 計
MP-1	82.7㎡	63.9㎡	77.7㎡	224.3㎡
2	70.2	52.5	67.3	190.0
5	88.8	70.2	65.4	224.4
6	86.7	89.8	64.7	241.2
7	89.5	87.9	64.7	242.1
8	76.5	95.0	70.9	242.4
9	74.9	91.9	73.8	240.6
合 計	569.3	551.2	484.5	1605.0

なお橋脚部分の調査深さは、調査の安全や地下鉄中央線の構造物との関係で、現車道面より4.5mまでとなっている。

第100次調査として実施した橋脚南側部分7箇所から出土した主たる遺構・遺物は表2(8頁)の通りである。

難波宮跡 MP-1で後期難波宮のものと考えられる掘立柱跡2箇所とそれに伴う蓮華・唐草文系軒瓦多数を検出した。また、MP-2では難波宮整地層が非常に良好な状態で残っていたが、遺構は検出されなかった。

今回MP-1で検出された柱跡(図2)は、

- ① 南北に並ぶ2個の掘立柱穴で、約1.4m×1.0mの掘形をもち、柱痕跡径は約20cm、柱心距離は2.80mを計る。北側柱穴は完存していたが、南側柱穴は鋼矢板によって南約4mが切断されている。
- ② 北側柱抜き取り穴より完形の蓮華文軒丸瓦(6303型式)や丸瓦片、南側掘形埋土より同種の丸瓦片が出土していることからみて、後期難波宮に関係する柱穴と思われる。
- ③ この柱列掘形より調査区域西端まで8.8mの間でこれと組み合う柱穴が存せず、また同橋脚の既調査部分(北側)でこれと組合う柱穴が検出されていないことからみて、この2個の柱列は、南北方向の櫺(1本柱列)であるより、東西棟か南北棟かは不明であるが、建物の西側柱列であると思われる。

- ④ 建物の規模・性格は不明であるが、後期難波宮内裏西外郭築地外方に存した官衙建物ではなかろうか。

大阪府・大阪市教育委員会がこの柱列の保存方法を阪神高速道路公園に要請したところ、橋脚位置を東にずらせる以外にないとの結論が出された。ところが橋脚位置を東にずらせた場合、この建物の東側柱列と重複する可能性が高い上に、橋脚MP-1・2の調査で明らかにされた難波宮下層遺跡や難波宮整地層、中・近世遺構や包含層の破壊を一層拡大する結果になるのではないかと憂慮された。そこで文化庁とも協議した結果、各時代の遺構破壊を最小限に止めるためには、橋脚を現位置に止めざるを得ないとの結論に達した。

この建物が破棄・削平された後の整地層中からは上述の蓮華文軒丸瓦(6303型式)や唐草文軒平瓦(6664A・6664B型式)とそれに組合う硬質・薄手の平・丸・面戸瓦片多数が出土したが、重圏文系軒瓦が一点も出土していないことが注目された。

これまでの難波宮跡出土瓦では重圏文系軒瓦の出上が圧倒的に多く、軒丸・平瓦ともほぼ90%を占めている。また、蓮華・唐草文軒瓦が出土する場合でも重圏文軒瓦と共伴する例が殆んどであった。今回の出土例は、蓮華・唐草文系屋瓦のセット関係をとらえる上でも、重圏文系屋瓦との編年関係を考える上でも好個の資料になるとと思われる。

中尾芳吉「重圏文軒瓦の製作年代と系譜についての覚書」(『難波宮跡研究調査年報1971』1972)

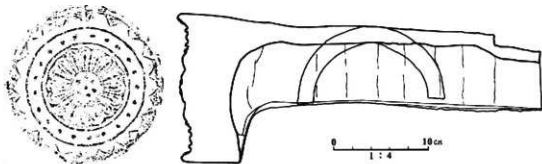


Fig. 1 MP-1. 後期難波宮柱抜き取り穴出土蓮華文軒丸瓦(6303型式)

難波宮下層遺跡 MP-1・2・5 から難波宮下層遺跡関係の掘立柱建物・溝・土壌・遺物包含層が検出され、須恵・土師器のほか木筒を含む木製品や植物遺体など多数の遺物が出土した。

MP-2 では、近世整地層から難波宮下層遺跡までの層序が大きな攪乱を受けずによく遺存していた。難波宮整地層と考えられる黄褐色粘質土層は約75cmの厚さで全面に検出されたが、柱穴などの遺構は認められなかった。この難波宮整地層の下層からは1~5cmの厚さの堆積層を介して土壌A~Fが検出された(図3)。この土壌は地山を切って造られた掘立柱建物

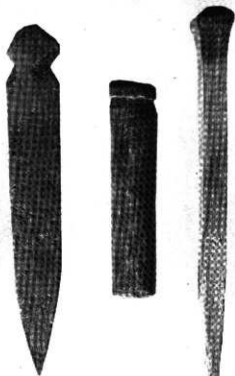


Fig. 2 土壙A出土木筒・木製品

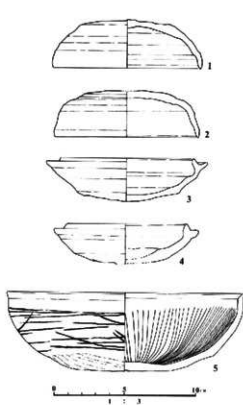


Fig. 3

土壙A出土須恵器蓋・坏、土師器坏

の廃棄後に堆積した黒灰色粘質土層を切って作られている。上層埋土には土器、木器、植物遺体など数多くの遺物が含まれていた。特に土壙Aの埋土は薄層をなして幾層にも堆積しており、木筒一点のほか、釘状木製品などの木器、材木の削りくず、焼木、自然木、炭、灰、植物遺体（桃核、米、瓜種、松 etc）、土器（須恵・土師器）が豊富に出土した。

木筒は貨進物荷札（6033型式）と考えられるもので、長さ16.0cm、幅2.1cm、厚さ0.3cmを計る、(Fig.2)墨書は赤外線写真の所見によっても判読し得なかった。このほかにも6033型式木筒の先端部ではないかと思われるものが存する。木筒の出土した土壙A埋土の土器の型式はほぼ一型式に限られる(Fig.3)。須恵器坏は最大径が10~11.2cm、高さ2.7~3.0cmと小さく、たちあがりは低く内傾していて、底部はへらで切り離したままの痕跡を止めている。土師器坏は、やや外反ぎみの口縁端部はわずかに凹み、外面はへら磨き、底部外面は一方方向にいてねいに削って仕上げている。内面は正放射状暗文を施している。Fig.3の5は口径16.3cm、器高5.4cmの大形品であるが、ほかに中・小形品も出土している。

これらの土器型式は、これまでの難波宮下層遺跡の土器編年や飛鳥小墾田宮推定地出土土器などとの比較から、7世紀中葉を下らぬ時期のものと考えることができよう。

中尾芳治「難波宮造営前の遺跡調査報告」(「難波宮址の研究」5の2、1965)

MP-2における難波宮整地層と下層遺跡の出土状況や各遺構出土土器の様相からみて、土壇A出土木簡は、前期難波宮造営時かそれ以前に投棄埋没させられたもので、7世紀中葉を下らぬ時期のものと考えられる。ただ墨書が判読できないので今回は出土事実の報告に止めざるを得ないが、採集されたコンテナパット65箱に及ぶ土壇A埋土中には木簡やその削りくずが含まれている可能性が高いと思われるので、目下その洗浄・整理を怠いでいるところである。

難波宮跡第66次調査で出土した「広呼大哉宿世…」木簡も伴出土器型式からみて7世紀中葉を下らぬ時期のものとして推定できる。近年平城宮跡を筆頭に全国各地から木簡が出土しているが、難波宮跡出土木簡がともに7世紀中葉を下らぬ古い時期のものであることが注目される。今回の土壇Aからの後統木簡の内容如何によっては、日本古代史研究の上での重要資料になることが考えられるので、その整理研究に早急に取り組むとともに、土壇Aの未調査部分の今後の発掘調査についても十分な検討をおこないたい。

今回のMP-2の調査は、7世紀中葉に遡り得る木簡が出土したということに止まらず、難波宮下層遺跡の性格や時期細分、前期難波宮の造営時期やその過程の解明に重要な手がかりを与えてくれる点でその意義は大きい。

なおMP-2では最下層の地山面から掘立柱穴5、溝3条が検出されたが、柱穴の一つには柱径最大部12cm、多角形の柱根が遺存していた。

中・近世遺構 前回の第93次調査では、MP-8(北側)で、現車道面から約3.5m(OP+14.5m)下から火災に遭った礎石建物跡とそれを埋立て整地した後に形成された旧地表面を検出するとともに、陶磁器など多数の伴出遺物を得た。これらの遺構・遺物の状況から、火災痕跡のある建物は、大坂夏の陣の際に焼失した豊臣氏大坂城田一の丸の遺構に比定し、焼土・焼燼の混在した整地層は、初代大坂城主松平忠明による市街地整備にかかわらせて考えたが、今回の100次調査でも、MP-8・9(南側)で同様の状況が発掘された。

MP-8では現車道面から約4m下で、建物礎石、杭列を伴う溝、掘立柱穴などを、MP-9でも現車道面から約3m下で建物礎石群や通路状遺構、溝、ピット群などを検出したが、いずれも火災痕跡を止めていた。調査範囲の制約もあってこれらの遺構の規模や構造については不明な点が多いが、礎石建物とそれに付属する通路や溝であろう。いずれも難波宮の方位に対して北で約15度東に振れる方位をもっている。通路状遺構は2個所で検出され

たが、約1.2m幅の部分が版築状につきかためられていた。

これらの遺構の罹災後、焼土や焼壁、瓦・陶磁器片を含む黒褐色土で厚さ10～20cmの整地がされていてその上面からは、桶梓井戸(MP-8)、建物礎石、20～30cm大の円礎の集石、石・瓦組の排水施設(MP-9)などが検出された。MP-8ではこの上層にさらに厚さ1.8mに及ぶ青灰色シルトの大規模な整地がおこなわれていた。

MP-8・9の所在する現東区森の宮西之町一帯は、豊臣氏大坂城の三之丸の一画に当たり、大名屋敷などが所在したと伝えられている。慶長19年(1614)の大坂冬の陣の和睦の結果、三之丸は濠ともども破却され、翌年の夏の陣によって焼亡した。豊臣氏滅亡後、大坂城主となった松平忠明は、豊臣時代の旧三之丸を壊平して市街地として整備し、伏見の町人などを移して大坂の復興に努めた。元和5年(1619)幕府は忠明を大和郡山に移して大坂を直轄地とし、翌元和6年から大坂城の再建に着手した。再建工事は前後10年を費して寛永6年(1629)に完成したが、再建大坂城は平面規模こそ縮小されたが、全体的に地上げされて見事な高石垣や広大な濠をもつ点で日本城郭中に全く比類のないものになった。

MP-8・9で検出された整地層や遺構の状況は、こうした大坂城の変遷の過程を具体的に跡づけるものであり、今後の大坂城研究の上で寄与するところが大きい。なお、MP-8では火災痕跡を有する遺構の下層から、井戸やピット群が検出されていて、井戸埋土より絵唐津の破片が出土している。

遺構の実測は今回も、アジア航測株式会社による写真測量による。折込み図面は、現在図化途中のものを利用して作成した略図であることをお断りしておく。

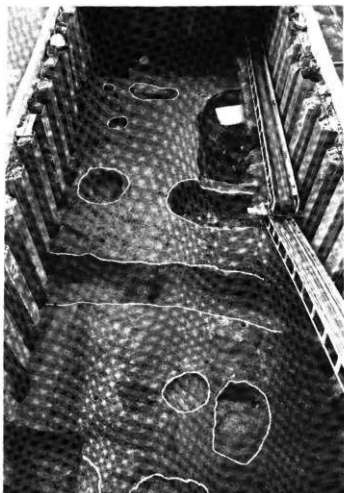
補註

MP-2 土壌A出土の植物遺体の一部を大阪市立自然史博物館第四紀研究室の那須孝悌氏に調査していただいた結果では、瓜、ひょうたん、桃、すもも、梅、ひし、栗、さんしょ、米、小豆、赤松、黒松などの存在が知られている。

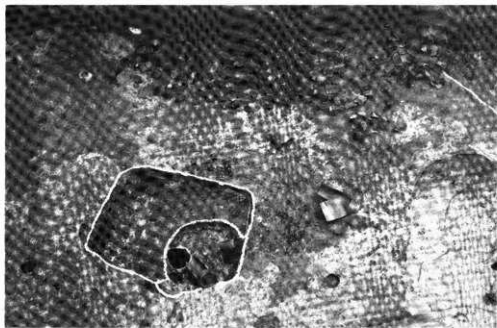
表2 第100次調査出土遺構・遺物一覧

橋脚	写真測量 年月日	主たる出土遺構	主たる出土遺物
MP-1		調査期間 76年11月22日～77年1月20日 近世旧地表面 中・近世遺構・遺物包含層 土壌、溝（灰色粘質土層） 土壌、ピット、溝（黒色有機土層） 後期難波宮瓦包含層 上面より土壌、ピット、溝、小石類?	漆器、瓦、陶磁器。 漆器、すり鉢、灯明皿、瓦、陶器
	77. 01. 14	後期難波宮建物柱穴2	奈良時代 瓦多数（蓮華文軒丸瓦6303型式、唐草文軒平瓦6664 A・B型式、丸、平瓦）、土師・須恵器片。 北側柱抜き取り穴より蓮華文軒丸瓦（6303型式）、丸瓦片、南側柱掘形より丸瓦片出土。
	77. 01. 20	難波宮下層遺跡掘立柱建物2棟以上、溝6条、土壌2。 地山面（GL-2.5m）	土師・須恵器片。
MP-2		調査期間 76年11月29日～77年1月27日 近世上層 近世旧地表面（版築状） 中・（近?）世ピット 中・（近?）世溝 難波宮整地層上堆積層 難波宮整地層（GL-1.6m） 難波宮下層遺跡 土壌A～D	瓦、陶磁器、古銭。 金箔押瓦、陶器（黄瀬戸、備前） 中（近?）世瓦、磁器。 中（近?）世瓦、陶磁器。 土師・須恵器、奈良時代瓦。 土師・須恵器片。
	77. 01. 22	下層遺跡遺物包含層 地山面掘込掘立柱穴5、溝3条 地山（GL-約3.0m）	木筒1、銅状木製品、木製盤ほかの木器、材木細片、自然木など。 自然遺物（桃・瓜の種子、松カサ値） 須恵器（坏、高坏、甕缶） 土師器（坏、壺、高杯、甕缶） 土師・須恵器（坏、高坏、甕、甌他） 柱穴1に柱根遺存。
MP-5		調査期間 76年11月26日～12月23日 中・（近?）世整地面 上面に石多数あり 中・（近?）世溝、土壌、掘形	中・（近）世瓦、陶磁器。
	76. 12. 15 77. 12. 23	難波宮下層遺跡柱穴多数 （ともに地山面掘込み） 地山（GL-1.4m）	中・（近）世瓦、陶磁器、瓦器。 土師・須恵器。
MP-6		調査期間 76年11月9日～11月27日 東側列は近・現代の擾乱のため破壊 暗褐色砂質土層面 円形土壌2、方形土壌1、ピット4 暗黄褐色砂質土層 ピット、溝	瓦器、灯明皿、土師器。 瓦器、脚付瓦質土器、瓦、土師・須恵器。

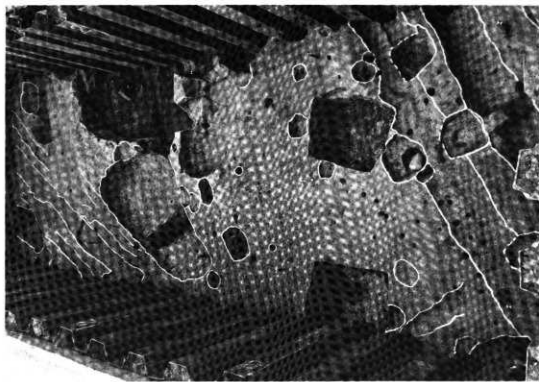
橋脚	写真測量 年月日	主たる出土遺構	主たる出土遺物
MP-7		地山面上 方形土城3、ビット14、T字状溝 地山 (GL-2.85m)	瓦器、灯明皿、須恵器。
MP-8		調査期間 76年10月16日～11月6日 表土層を除くとGL-4.5mまで近世時の 整地層。 黄褐色砂層（東へなだらかに傾斜する 固い面をもち、一部が焦げている） 黄褐色砂質土層（攪乱された難波宮整 地層と思われるものが混る）	瓦、灯明皿。 縄目甲目瓦、近世瓦。
MP-9		調査期間 76年10月12日～11月25日 近世旧地表 推定徳川氏大坂城再建時の整地層（青灰 色シルト層） 推定松平忠明整地層（焼土・焼壁包含黒 褐色土層） 桶組井戸	近世瓦 瓦片 木製品、陶磁器。
	76.11.12	推定豊臣氏大坂城三之丸遺構 礎石建物、枕列を伴う溝、ビット群	瓦、陶磁器、古銭、金属器、漆器。 曲物、骨伝。
	76.11.25	三之丸遺構下層より、井戸、ビット群。	井戸埋土より絵唐津。 青灰色細砂質土層より瀬戸・唐津・備前 など。
		調査期間 76年10月19日～12月2日 近世旧地表 推定徳川氏大坂城再建時の整地層 推定松平忠明整地層（焼土・焼壁包含黒 褐色土層） 礎石建物、薬石、石・瓦組排水施設。	瓦
	76.11.12		瓦、黄瀬戸、志野、瀬戸天日、唐津、備 前、信楽などの陶器や染付磁器（明）。 瓦黄羽釜、灯明皿、木製品（下駄、桶、 人形頭他）、釘、疋丁、宋銭。
	76.11.25	推定豊臣氏大坂城三之丸遺構 礎石建物、通路状遺構、溝、ビット群 （これらの遺構は青灰色シルトを2m 以上整地した上に作られている）	瓦、黄瀬戸、志野、唐津、備前、染付な どの陶磁器、灯明皿、壺壺、釘、キセル、 小瓶、木製品（下駄、桶）宋銭。



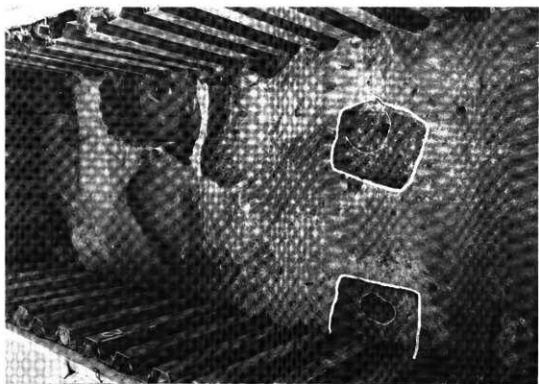
①MP-1
近世遺構面の
溝及び土坑群（東から）



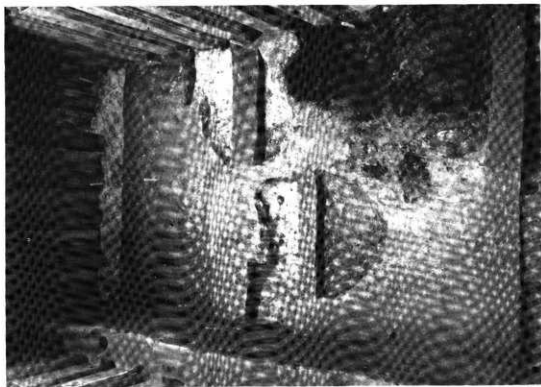
②MP-1 瓦堆積と後期難波宮北側 柱穴と柱抜き取り穴内の蓮華文軒丸瓦（北から）



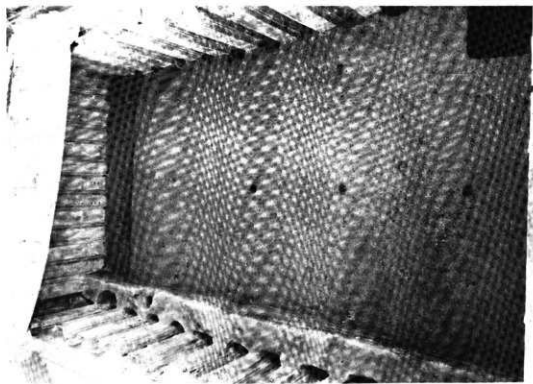
④ MP-1 藤波宮下層遺跡の壁立柱建物の溝、土盤 (東から)



③ MP-1 後期藤波宮南北柱列 (東から)



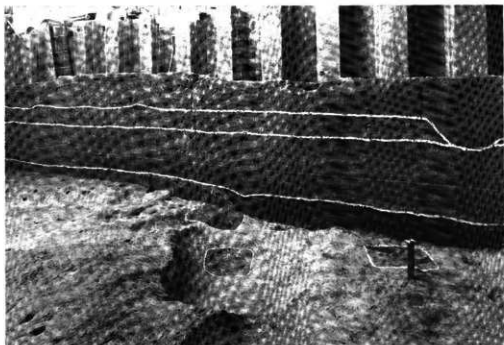
⑥ MP-2 下層遺跡遺物包含層を切り込む土葺群抽出状況 (西分5)



⑤ MP-2 籠状宮壁地層上面 (西分5)

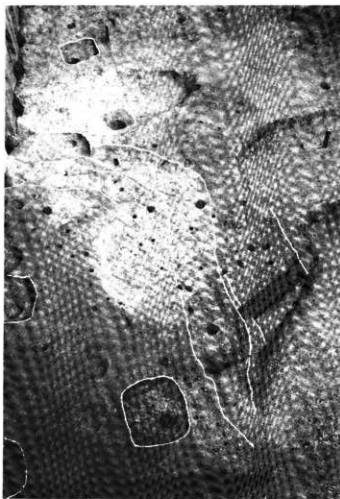
⑦ MP-2

下層遺跡遺物包含層を切り込む
土拡群 (西から)

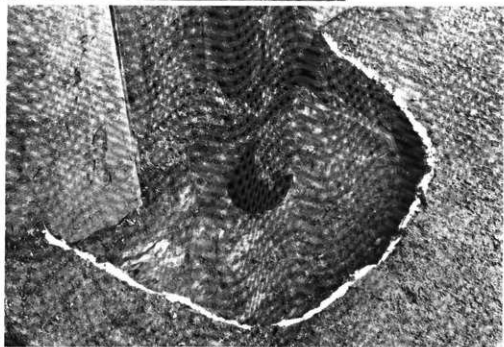


⑧ MP-2 土層堆積状況および下層遺跡柱穴

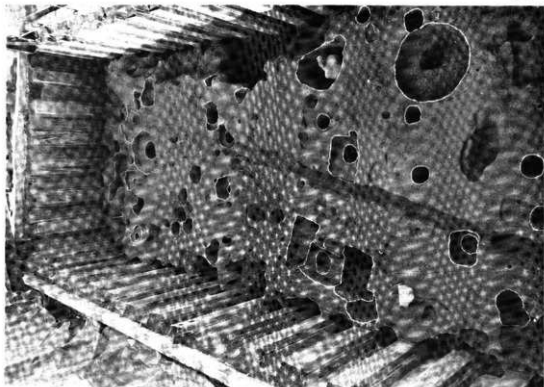
(東南から)



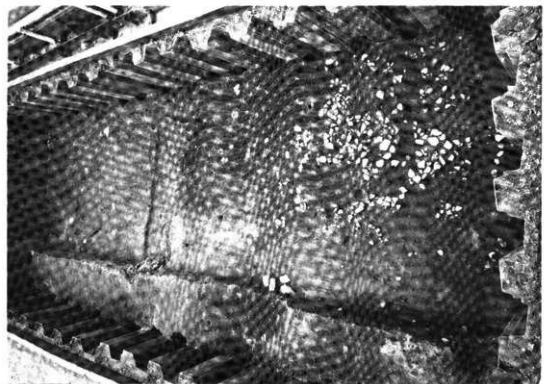
⑨MP-2
下層遺跡、柱穴、溝
(西から)



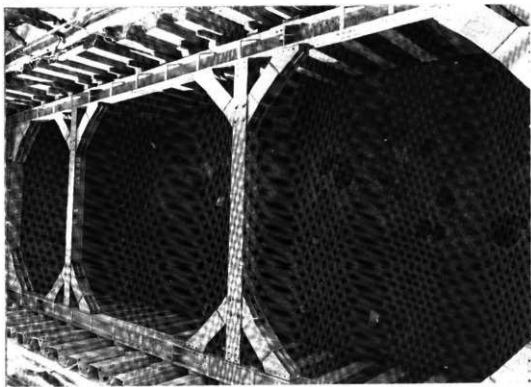
⑩MP-2 下層遺跡柱穴の柱根遺存状況 (南西から)



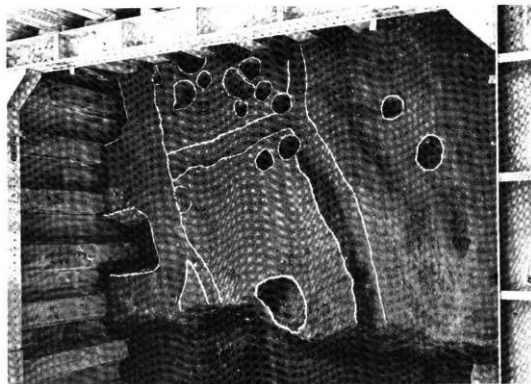
⑫ MP-5 全景 中・近世溝、柱穴、下層遺跡柱穴 (東から)



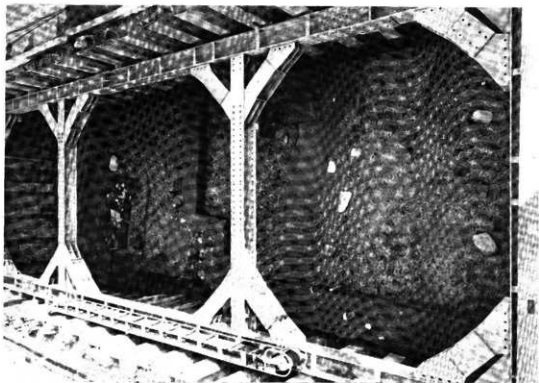
⑪ MP-5 近世旧地表面 (西から)



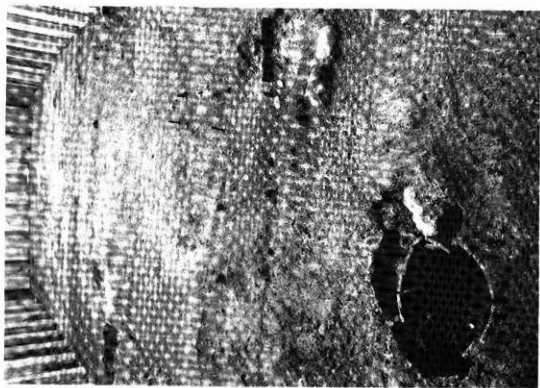
⑬MP-8 火災痕跡をもつ近世溝、柱穴、礎石群 (東から)



⑭MP-6 瓦器片の検出された中・近世柱穴と溝 (北から)



⑬ MP-9 火災痕跡をもつ近世硬石産物跡、通路状遺構およびその
上層整地層に伴う瓦敷、石・瓦組拵水脚設 (西から)



⑭ MP-8 火災痕跡をもつ近世旧地敷と
抗列に伴う溝 (西から)



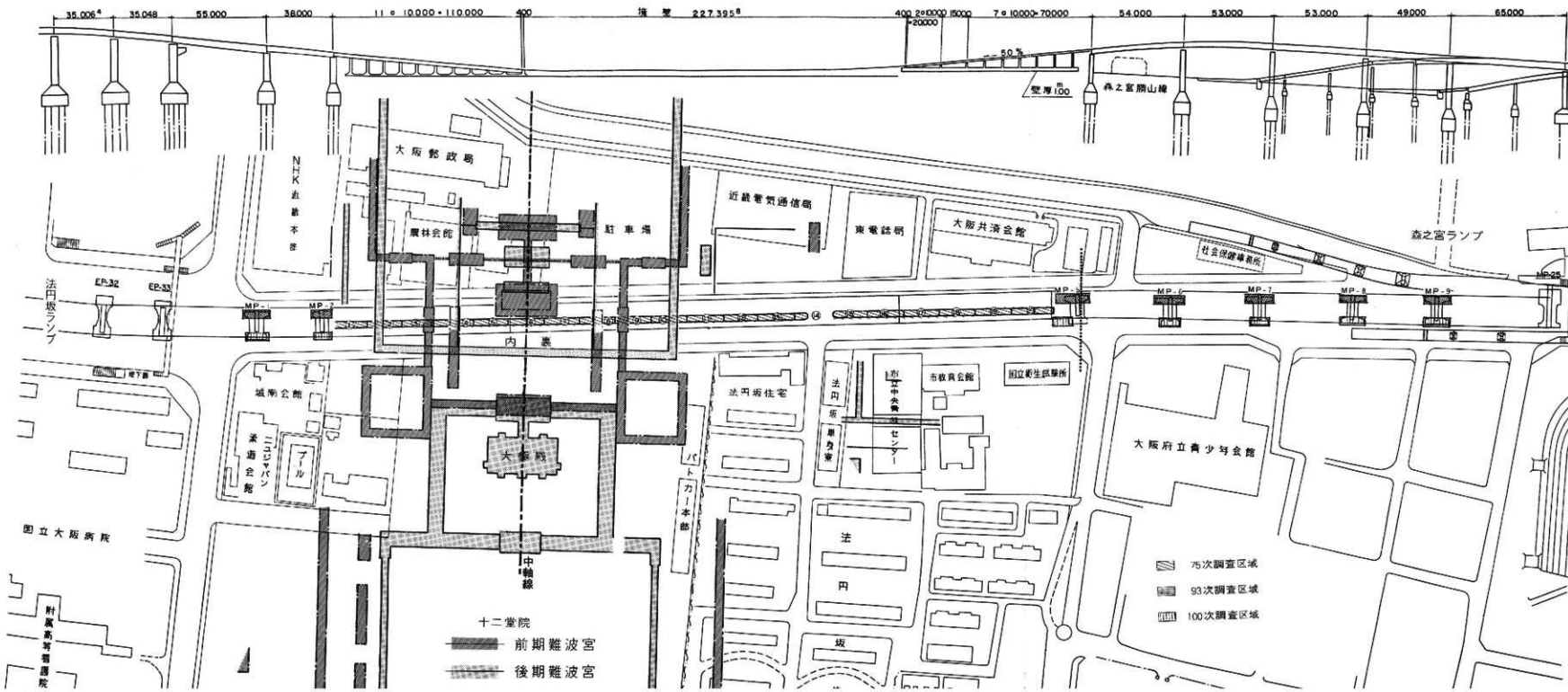
⑰ MP-9

火災痕跡をもつ近世礎石
建物跡及び通路状遺構
(西から)



⑱ MP-9 近世石・瓦組排水施設 (南から)

図1. 難波宮跡および大阪府道高速大阪東大阪線略図



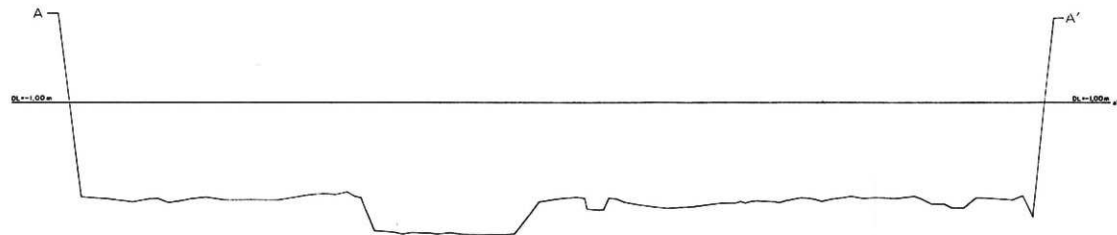
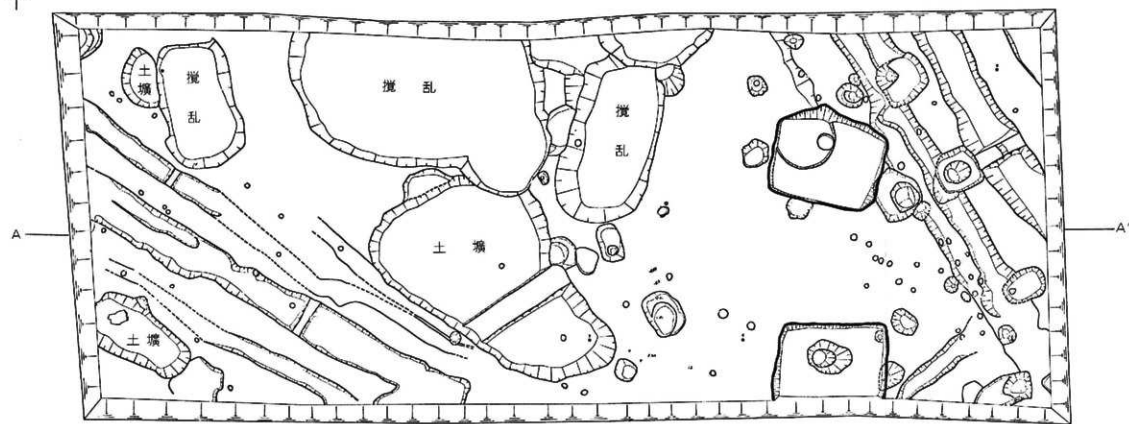


図 2. 橋脚(MP-1)南側平面略図 (後期難波宮柱列および下層遺跡)



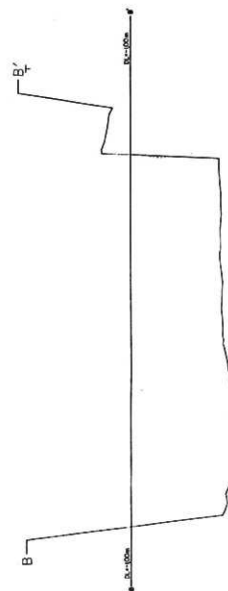
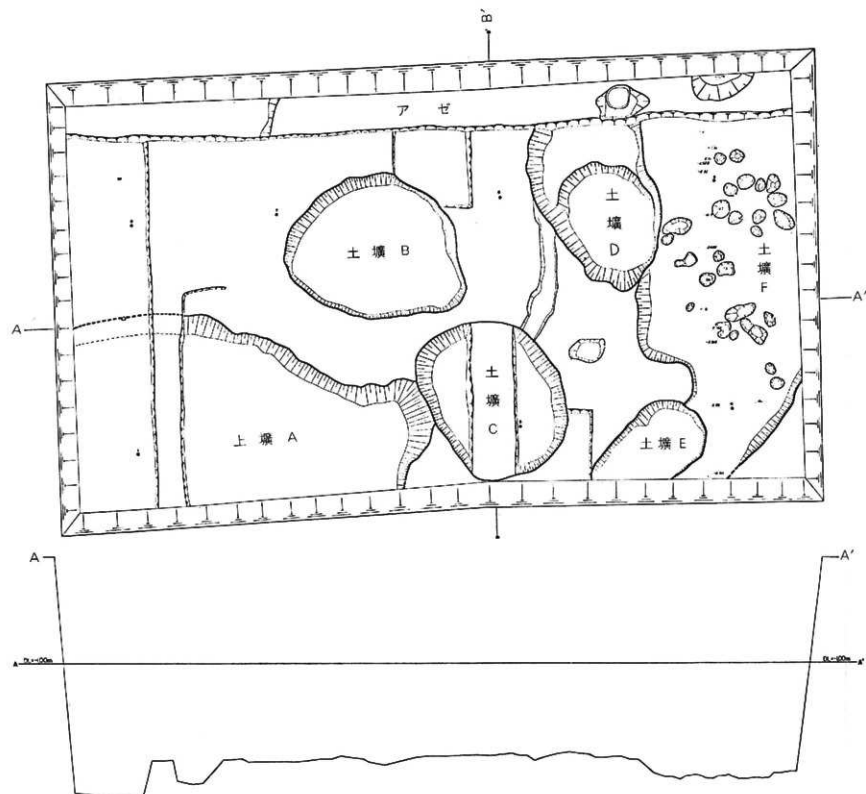


図 3. 橋脚(MP-2)南側平面図略図 (難波宮下層遺跡土壇群)

